海外アカデミック・ディスカッション		
同時代イギリスからみた日本の近代化 ―日本におけるラファエル前派主義を背景として―		
江澤　美月		比較社会文化学専攻
期間	2008年９月30日～10月28日	
場所	イギリス	
研修交流プログラム	Japanese Modernity	
施設	The School of Oriental and African Studies, University of London	

博士論文では、明治期上田敏によって推進されたラファエル前派主義の政治的インパクトを考察する予定でいる[1]。この日本におけるラファエル前派を考察する上で重要なのは、その原型を生んだ国イギリスと日本との当時の関係である。日英の外交史では、幕末の1858年に日英修好通商条約が締結され、明治時代には、1902年に日英同盟が締結されたこと、またそれに至る過程で日本の近代化が推進されたことが知られている。しかし外交レベルの研究に比べ、文化レベルの研究、特にイギリスが日本の近代化をどのように評価したかについての研究は、国内ではあまりなされていない。その点ロンドン大学のSOASには、Department of Historyに、Dr Angus LockyerによるJapanese Modernityの講座が設置されており、海外における日本の近代化研究の一端に触れることが期待された。

Japanese Modernityは、修士課程の学生のために９月に開講される２学期にわたる講座であり、筆者が参加したのは、江戸時代を扱った最初の１学期である。出席者は男女合わせて10～15名程で、イギリス人のみならず中東、サウジアラビアからの留学生や、日本人もいた。学生の多くは、歴史学的な関心に留まらず文化的、政治的関心を持っており、中には日本で教職等の就労経験がある学生もいた。授業形式としては、毎週計100ページ程になる５，６本の論文を読むことが課題として課され、２時間の授業の中では、江戸時代に関する研究の蓄積を知るために、その議論展開の読み取りに焦点が当てられた。

一か月で総じて20本程の論文を読み、他の出席者と各自の読みを深化させるためのディスカッションを行った結果感じたことは、この講座の第一の特色は、近代化の再評価にあったということである。従来近代化は明治時代に固有のものと解釈されてきたが、この講座ではそのことに疑問が投げかけられ、とくに該当学期は、江戸時代が近代化の萌芽期に相当するか否かが一つの論点となった。

第二の特色として挙げられるのは、江戸時代の民衆を封建制崩壊の原動力とみなす視点である。江戸時代の封建制の固定制、沈滞性は従来よく指摘されるところであるが、この講座において民衆は、その占める場、身分、情報の三つの側面から封建制度内の状況が考察された。まずThomas C. Smithの“Pre-Modern Economic Growth: Japan and the West”をもとに、従来固定のものと考えられていた民衆の居住地は、よりよい経済活動の場を求めた結果移動性が認められることが確認された[2]。次にHerman Oomsの<u>Tokugawa Village Practice</u>からは、同じく従来固定化しているとみなされている身分に関してもまた、村という限定されたコミュニティ内ではあるものの移動性があったことが確認された[3]。最後にH.D. Harootunianの“Late Tokugawa culture and thought”では、幕末には、従来情報統制されているとみなされていた階層の人々の間にも、情報入手の動きがおこったこと、明治維新はあらゆる階層の人々の集合的な情報入手の意志の結果であることが確認された[4]。

以上述べてきたように、今回の海外アカデミック・ディスカッションでは、当初計画した近代化研究とは多少異なる面はあるものの、代わりに近代化をより広い視座で眺めることができ、江戸時代をも近代化の範疇内に収め、その民衆をその推進者として考察する視

点が得られたことになる。博士論文との関連では、日本におけるラファエル前派主義の政治的インパクトを、社会の発展に対する民衆の潜在的な関与との視点から考察する手掛かりを得ることが出来たといえる。それというのも上田敏は、明治期に江戸美学の復興を試み、その復興の支持母体として民衆を想定しているからである[5]。

授業の他にもSOASでは、日本の歴史文化に関するレクチャーが、Japan Research Centreを中心に定期的に開催されていた。そのなかには例えば教科書問題のように、現代の日本に対するイギリスの生の声が聞ける企画もあった。その他にも筆者の滞在中には、2008年に150年目を迎えた日英通商修好条約の締結に関する記念展示会やレクチャーがロンドンの日本大使館で催され、元駐日大使による日英外交をイギリス的な立場から概観する記念講演や、明治政府が近代化の時期に招致した「お雇い外国人」に焦点をあてる歴史セミナーに、参加する機会を得ることが出来た。またBritish LibraryやOxford大学のBodleian Library, Victoria and Albert Museum内のNational Art Libraryでは、幕末から明治期の日英関係に関する資料収集を行うことも出来た。こうした授業内外における多面的な日本の近代化理解に触れることで、今回の海外研修は一層実りあるものになったと思われる。

なお本研究の成果は「明治期日本における江戸美学の復興――ラファエル前派と上田敏――」（仮題）として日本英文学会等で発表し、博士論文の中で更に論考を積み重ねる予定である。

註

1　上田敏とラファエル前派との関わりについては以下の拙論を参照のこと。
　江澤美月「明治時代のラファエル前派主義―D.G.ロセッティの『詩集』受容の背景―」『文化表象の政治学――日韓女性史の再解釈』　お茶の水女子大学　21世紀COEプログラム　ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）プロジェクトD「理論構築と文化表象」2007年８月24日　pp.36-43

2　Thomas C. Smith, “Pre-Modern Economic Growth: Japan and the West,” Past and Present 60 (1973): 127-60.

3　Herman Ooms, Tokugawa Village Practice: Class, Status, Power, Law (Berkeley: U of Califolnia P, 1996) 1-10, 71-134, 189-91.

4　H.D. Harootunian, “Late Tokugawa culture and thought,” The Emergence of Meiji Japan ed. Marius B. Jansen (New York: Cambridge UP, 1995), 53-67, 137-43.

5　上田敏　「文藝論集」『定本上田敏全集』第三巻　教育出版センター　昭和53年

えざわ　みつき／お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科　比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

明治期の日本におけるPre-Raphaelitismの受容を研究対象にしている江澤さんにとって、今回アカデミック・ディスカッションに採用されたことは、普段と違った視点に立つことで視野を広げ、自らの問題意識にさらに強い基盤を与えるよい機会であった。（本人の報告にはあまり書かれていないが、）江澤さんは授業に際して十分な準備を怠らず、英語による討論に積極的に参加したといい、担当教員による成績報告においても、その点が特記され、全体として高い評価を与えられている。この経験とここで得られた自信が貴重な飛躍の契機となったことは、彼女の今後の研究成果が証明することになろう。ロンドン大学図書館の利用など、プログラムの副次的な恩恵も、有効な働きを加えたものと想像される。

（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　教授　内田　正子）